



コミュニティ実習始まる

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

引越しの季節

2月の最終週に初めての实習が始まった。助産学生の実習先は大学の周辺2州6病院に散らばっている。自宅通学の学生は家から近い病院を実習先を選んだけれど、大学寮の住民たちは大学が振り分けた病院の看護寮へその週末引越しをした。そしてこれ以降、病院の寮をベースにして、そこから実習へ向かい、講義のあるときはここから大学へ通うことになる。

学生の楽しめるクラブや映画館が充実しているギルフォードの生活を半年楽しんだ学生たちは、未知の実習先へ引越していくのに気が重そう。場所によっては街への交通が便利なのところもあるけれど、特にレッドヒルはその点最悪。病院に近い以外、そこに住む利点はなく、学生たちにデッドヒル(dead hill)と呼ばれている。

「実習1」開始

実習は3年間に計9回67週間あり、初めの2回(各6週間)はコミュニティでの実習になる。各自メンターについて、コミュニティミッドワيفの仕事学ぶ。主な仕事は、妊婦健診(主に診療所で)、産前学級、家庭出産の介助、産後の自宅訪問。この地域は家庭出産率が2%と低いので、この実習期間中に立ち会えたらとても運がいい。

現場研修の2日間を実習先の地域で過ごしていたので大体の様子は掴んでいたけれど、メンターと「仕事」をするのは初めてで最初は緊張し

た(現場では学生の実習を「仕事」「仕事する」ということばを使っていた。ただの単語なのだけれど、呼び方一つで、ぐんと自分が参加している気になった)。

メンターのパム

私のメンターのパムは助産婦歴20年あまりのベテラン。コミュニティでの仕事が好きなので、それに多分病院勤務には向いていないので、コミュニティのみで働いている。いま大学生になった長女が生まれたとき、家庭での時間を大切にしたいとパートタイムに切り替えた。とても話しやすく仕事しやすい人。こんなベテランのパムの真似をするなんて無謀なこと、でもたくさん学びたい、と思わせる人だ。

助産の技術と知識はもちろんだけれど、まずはコミュニケーションスキルを見習いたい。妊婦健診で診療室に妊婦さんを迎え入れるときパムは、初対面でも顔見知りでも、打ち解けやすく話しやすい雰囲気をすぐ作れる。「赤ちゃんという家族の一員が増えるとき、新しい家族をスタートさせるのは簡単に行かないことが多い。これから幸せな家庭を作れるかどうかにおいてもその時期は大切だから、その過程をサポートしたい」というのがパムの助産哲学。

パム担当のクリニックは月曜の午前：妊婦健診(1人15分)、木曜の午後：初診(30分)がある。それ以外は産後の自宅訪問に地域を車で回るのが日課だ。産後自宅に戻った翌日から家庭訪問が始まる。お母さんと赤ちゃんの様子に合

わせて訪問の頻度は違ってくるけれど、生後10日まで平均4、5回会いに行き、その後母親のケアはGP(一般医)に、赤ちゃんは保健婦に引継ぎをする。

パムの車でいろんな家庭を訪問した。子どもの誕生に合わせて、環境のよい場所に越してきたばかりのこの地域で典型的なキャリア持ちのカップルや、裏に馬小屋と牧場がある乗馬が趣味の夫妻もいたし、入ったとたんタバコの臭いにくらくらす家もあったし、10代の母親にも会った。

胸にキャベツ、お尻にグリーンピース

パムのアドバイスで当初耳を疑ったものが2つあった。1つは、張って痛い胸には冷えたキャベツの葉を1枚ブラジャーの下に入れるのがよく効くらしい。「セクシーすぎる！ 夫が喜ぶわ」と産婦さんは笑いながら言うけれど、次回訪問するとみな「キャベツの威力はすごい」と冷蔵庫にキャベツを常備するようになっているのがおもしろかった。

もう1つは、冷凍グリーンピースが痔の痛みを和らげるのに効果あり。小さなビニール袋に入れて、お風呂の後患部に当てるのがいいらしい。氷のように溶ける心配もないし、お豆の形もいいらしい、それに凍らせて何度も使える。「ただ間違って食べちゃわないように、どの袋がお尻用か覚えておくほうがいいわね」とパムのアドバイス。

家に帰って報告

夕方実習から戻ってシャメリーとその日にあったよかったこと、不満だったことをしゃべりあった。今日の経験を言葉にして交換するとすんなり飲みこめることができて、嫌な経験も気持ち処理して次の日に臨めることができたと思う。

シャメリーのメンターはコミュニティと病院半々の勤務だったので、シャメリーも病院で過ごす時間が多かった。理想主義者のシャメリーは病院で行なわれていることにたくさん不満を



クリニックで検診中のパム(右)

もって家に帰ってきた。助産用語一つにしても例えば「介助する」はどうして“deliver”なのか？「ビザはデリバーされるけど、赤ちゃんはデリバーされるんじゃない！」。それに先輩助産婦たちが妊産婦を「患者」と呼ぶのも気になった。大学の授業では「患者」は避けて「女性」「お母さん」を使うのに、現場ではそれが徹底していない。シャメリーの話にうなずきながら、でもまだ分娩室に入ったこともないし、出産を見たこともない私には実感の湧かないこともよくあった。

最初の実習で出遅れる

シャメリーはメンターの仕事を見ているだけでなく、どんどん実践している。血圧測定、尿検査、触診は私も始めているけれど、採血、ビタミンKの注射や、妊婦健診も自分でやって経験を積み始めている。シャメリーのやっていることを聞くと、自分の遅れが目立って焦る。それでも、いまの自分のコミュニケーションスキルと知識では、それはまだ早すぎるし無理。慌てて手を出すのはやめて、もっと自信がつくまで時間を取ろうと考えた。あとで大学に戻り実習の反省会をした際、私ほど手を出していない人はいないことを知ってさすがに焦ったけれど、これは次回の実習の課題にすることにした。